





序

小町氏藏書

水落文庫

花乃さゆりのまよも月よま
 かわちりしゆは人乃いにけ
 みるゝ女のうけりきりあ
 つみさく玉を藤葉とかなりけ
 ありりちりけめんささる
 家いこのさしやせんと
 こらあふさささささ

春之部
ひの遠く〜
り〜
ゆ〜
ゆ〜

あはれ

俳諧玉藻集

平安 夜半高下蕪村輯

春之部

ゆつ〜
元日や掃ぬ赤例も松の影
ゆ〜
松化所恵や他〜
佛より〜

まこいしお子るりさつ片を
かろいの中や何よき
梅もあや雷のあふれの一やあへてん
こころむつりさおあうら
んかめくくさるりあも

初梅や文半とを思ひしを
ヒセ紫音

盃やあさくして走るむめのこも 梅

梅を折隣もあさくさく約瓶は 園女

ちぬその梅むしはち東風の智月錦江

日は梅よ思ひぬ意のなほ
氣のそくぬ入相すそ梅は
登るあは梅あさくむるまわりも 智月

寄古今梅

はくさめり何子色こそ梅のは連 園女

壬午のこくさあ神のさるり
はくさめり何子色こそ梅のは連 園女

梅の子ねをよも八百何十年

貫之の梅

おめりもや平重印あつても花房
 うつろい初らほいあな三州平久保少女
 けそ赤と又お梅よつらうあ 紅糸
 むをのへおやうあ木村小 周あ
木曾嫁女
 雪汁のめくといまゆよまのあ 初月
 春のあよふあう人のまきあ 思あ
梅屋女
 花のまきあう雪のまきあ

伊奈木川

手揺み風と柳よまきあ 周女
 青柳と宗祇の装の匂いあ
 風かき衣よ深いま柳うち尾 芳樹
 大木子思くまきあ柳か とあ
鳥のまきあは蒲團も移さぬと子を
 出さぬ人もまきあ流水むあ
 親も子も伊奈川月やわいも社色
 神をたぬの鐘つまきあ川に霜老松吟尾

いなりや草を搦まはく 里め
右た志れぬひのまき 池つ
あつめぬあつて 雀か、いち
白をたき 湯く 雄たけ 五里
我のせし 廊をよといのあり 世女
すれ 搦 袖も ぬつく 煙く 南 あり
雉の尾の つか さら 草は 此色

鏡石

雉子の啼 鏡のたれや 天の原 園女
深々 山や せりぬ 草は

水母

咲ぬ ちも ものに ちる ぬ 草は
大和の 子よ ちる ぬ
莫より 志すし ぬ ぬ 草は
かくいへる ちも 別ち ちる
笑た ち 燕と ちる ぬ 草の 猫

猫ぬすまらる

猫の妻いりある君のうをむひり嵐雪

ねりあふて伏籠をうけり花女月の

其角張いさむ

ゆの田家あすも春有袖の月は籠口

男あふ二返アヲニ寝てんんとよ

二見

妻目てる二つハ誰のさすとめ

くのちま子芥白ハす。女の南簪

よ雨の所々や新は写雀羽取

形記

角やかの、翅及池の魚周女

蛭とりあ苗子勢ふこらみれ色

葉のちやくのこすれて種大根アコアん

膝くハかまをあれめ何いらんすて

物や田ついらても花ま膝黄こあち

一のよはむも 花の一鏡 右貞女
 ぬきいよつ 花の多あめ 田上尼
 見るところ 家惜し山さく 智月
 入相の鏡より 瘦るる山 橋
 山さく 草や小川の 水車
 見はたして あそこ 山櫻 川
 花散りぬ 花を 知つて 花橋 尚白
 掬子 ぬちる 花の 立す 羽衣

キ角張り

土の黄ち ぼろ 子 白や 花の家 笹分
 具人の 多 花も 花の 辰下
 花ありぬ 花 世男の 情 素子
 津 彦 哉
 花山の 間く 下 花の 花 園女
 花その 宮

鳥の春分ある方へ四方辨一周年

鳥の春分ある方へ四方辨一周年

宮川をたづねてみる

さあひもつらなる春のねほり

市枝川

備前のもつこの馬やをうつ

芭蕉を訪ひし時

のち人の自筆ののちのち

晴雨もやうなうてある梅並

花の前子影をうつしや夜衣

角ひりの猿の酒もかか

蒲団をくぬぎの雪もか

舎つとと

眠る人もかたむき

追くもりある人のま

尾部山

三柱の拍子子うたをき

尾部山

奉納

梅のこゝろをありあけしや神祇の
もと我ハ簪子用あは様は
花のまじハ乳母をあらは様所、

思夜櫻

直きくしや太閤様のおくす持 園女
あゝとの状と届つさくす持、
思ふ代の日傘子成さくし 辰下

祇子のよるこゝろをいさくは花盛 智月
兄弟ハとんていさくは花はり、
花咲くしをいさくの持物りひ、
何れはや花の指の車一た、
友持や聖としりあをの娘 少女
おらそをいさくはをく梅は 地女
短尺やいさくのまじくをの枝 系
世を子垣も誂しけたふ 京文

此家の和泉の堺をとや
 主ハちりぬりまゝとかりぬりと
 のいぬし色さ世 一をかたや
 さんこ呼入一人ありなむこと
 此れよろまこ子住あふとあう
 とやりのち風流よあも風流
 いまむさきの野子し細路の
 をあひひるけあくとくあうく

此五の岡子とゆへ氣よあをのた園女
 孫女もしし

麦葉の家てく人雨蛙 智月
 留紙より極生るゝぬるこりか
 其はちとくに粟はの田う川 秋之
 出代やこあいの雨もきよ斗 川人
 かりりも仍甲てかりやむの只 園女
 かうりしも櫛も昔やちり椿 羽紅

御書集

仲るふよ足伝つくる御年吉次母 挑女

枕の音るる夜

柳すげ去身の男のよる挑女 七口士

馳走する尹と我あれぬ籠の客 梅

拙柳くりに何れや女の子 羽衣

桃のうらやほ位は尿せぬ婢子挑女 智月

上巳

雛まゝし局もあやや姫の子 川

いくともさうぬものや雛の髪 松吟

あやもく子持あやや雛抱い 朱芳集

相思子

おたりふ酩貝や花よ雛抱 幸女

山ついでしあまるんよらる名乳 智月

山吹のよきうとあやぬあし挑女 いく

寄拾遺 歎冬

めいふいあや射るりや雀子 周女

御書集

六田渡

山にのり川よりあつる雲下りてふ
 園女
 おとこもすまふもまふも
 の月を女もあつるも
 ぬもあつるもあつるも
 ぬもあつるもあつるも
 もつるもあつるもあつるも
 ぬもあつるもあつるも

おとこもすまふもまふも
 の月を女もあつるも
 ぬもあつるもあつるも
 ぬもあつるもあつるも
 もつるもあつるもあつるも
 ぬもあつるもあつるも

御詩三篇集

十一

御誦五葉集

CC
七
五

復之部

四月影ら高たるとく

更衣三つく織くぬ罪深し一園女

おちり日
香久あふりやうて

あゝ美しうあをハ誰よりか

まや孫子酒こけりく更衣

風はやうく子孫をさうく大坂久女

恋死を我場へちけ部云お女奥列

眞愚上人よりうら

けつちうと衣ころれこゝろのち 智月
 何をあそまひそつ園のちうん
 柳の風鏡まの 尚
 入相の雲のちや 女
 男あつ追へまはか 女
 あげやく今ハいあん時のち 女
 房さうこあの下屋のちる、

裏ちをまろく 寝よとの鏡う 子 親 託 色
 山里をちめやかり 女子 郭 久
 ほうくあろくおくて 田長 智
 交りるに憎き人 小 智 智 月
 昼やれとさのこいり 子 親
 書あつせよ 儀 子 志 友 申 子 友
 啼き入 笑り 公 子 友

うのちや投ううさやを細うる周あ
 うのちの、品もかゝらぬらあの花、
 富士の根より難あううう及志所松吟
 升しうあをさむいも夢の思ひは万里
 爪をつまむる若子育つる若根根の好女
 春衣子春の目もわらぬあ女女 じん

猿沢マヅ

水うたへ被るうう某一人の影園女

すげのあまんて位のある白牡丹久女
 白牡丹子ハ愛人も物なれと智恵
 服はハ花ハ花ハ花ハ花ハ常女
 水ハ水ハ水ハ水ハ水ハ水ハ祇園下屋
 かるつそじいつらんとして好女 奥所
 柏の香子 狐氣をよめ今火何世 母
 筆の鞘焼て結あわうう尼 芳樹
 獨あやあうう男好のま尼 智月

以乳の人序あやや所 松柳 春毒 後戸

男あやや 春毒 八こハい物性 花女 口交縁

ま松や月力布目の帳の中 田あ

かあ 毒 虹見る花の涼り 千雀 毒

夢や 毒 波つるこい 甲武 毒 智月

石竹や 誰花こ 毒 ちと 花女 けし

白雉の人 毒 喜 毒 麦の中 花女 慎女

あの中 毒 一 毒 春田 毒 外

平鞠 毒 あ 毒 花 毒 とも 毒 下 毒 あり 毒 水 毒 智月

あ 毒 花 毒 子 毒 袖 毒 とも 毒 下 毒 あり 毒 白 毒 花

あ 毒 ち 毒 入り 毒 入 毒 帳 毒 入り 毒 織 毒 花 園女

と 毒 花 毒 子 毒 花 毒 と 毒 猫 毒 の 毒 跡 毒 あり 毒 花 毒 園女

夏菊や菜と 毒 花 毒 入り 毒 床 毒 の 毒 上 毒 智月

多田院 毒 あり 毒

金 毒 入り 毒 縁 毒 つ 毒 へ 毒 花 毒 入り 毒 合 毒 縁 毒 の 毒 屯 毒 園女

花 毒 入り 毒 入り 毒 花 毒 入り 毒 園女 毒 錦 毒 昏

駕卑一の待する姿の涼戸 梅
早下りし誰つやあらん涼舟 秋色
崎角をすすくはる涼 五位の多 知月
涼川や文田の暁の昼ありり、
其う涼く老ちを嘆せよ夕涼、
とわんさくもあそび足らぬ涼屋の秋色
氷花子 俗あ
石より針 生善と入れば清くさ、

下より糸のものとや園をく帯あ
静掃風斬散髪眠
巻くの中子いよく園をく 園女
香附子のしりえ涼 暑く 紫白
夏やし子に髪あそび 暑く 園女
氷花子 銭別
秋う尾も馬上の氷の黒うさ、
夕涼よりよはれを清くさ 暑く 羽紅

父かちや所はらさる人も皇朝に智月

まきよし

をらあとも何の侍後を左侍采田田女

子依等りいさ京んせよ祇園屋紫臺女

中干や具足提りう精い出るお女原

其角あいのむ

日く子流手合せし百合の花純を

昼鳥や雨降りぬ糸の流 智月

蟬の羽の舞きうらり竹の花園女

を物々いしくせりらのの花知月

母の鼻まき

家乳の乳けと取く花女

我子をいむ

付もこのりを花のつあん 己ん

はめをくいちく蓮り申 結と

尊心向ふの社者深しありめ

秋之部

乙女よりすまぬりてなほよしのきよ　乙の女

秋之部

亦る此のきりきりハヒス　^{拍子}二葉ハサテ

相の切あ子惚おて身よ若あハ　^{伊賀}てき

虫の巢のしらを初々　^{素馨}此の月

大内のかさうぬすん星みよ　^{千子}子

七夕の君もあつ　^{松吟}も光りあ

か針や舟川とあん天川　^{綾戸}綾戸

ゆあろろ星合の落りけりあり　^{春女}春女

たもへく、観役の木の恥 園女
 見るまじし 拙役木の玉ふく 〇つ
 施尊鬼柳く 〇るハ相の古位牌 榎桂
 観赤種のとすれー 角山豆山 りめ
 多夕子見る子とるる 踊山 川ん
 元山子秋のとりつく山 〇る 園女
 花梨くのいするくもあつりく 花女 〇る
 華一の咲や寝るも 呵られす 智月

華一の咲や寝るも 呵られす 智月
 花梨くのいするくもあつりく 花女 〇る
 元山子秋のとりつく山 〇る 園女
 多夕子見る子とるる 踊山 川ん
 観赤種のとすれー 角山豆山 りめ
 施尊鬼柳く 〇るハ相の古位牌 榎桂
 見るまじし 拙役木の玉ふく 〇つ
 たもへく、観役の木の恥 園女

柴舟の寄りもちりあさるるはは千子
 船梁のあつらへらるるのあさるるはは千子
 御寄りもちりあさるるはは千子
 垣越より誰殿よりんふらけり 夏妻
 えせとせの破つらんおの針一万里
 粟の穂の寄りあつらへらるるはは千子
 一羽のふらけりあつらへらるるはは千子
 一羽のふらけりあつらへらるるはは千子

兄を弟は供へてのせうに宿るる
 及すのくくそり後心の心を

いせゆけのよるるはは千子
 箱玉の指はらやあつらへらるるはは千子
 弟月や琴柱子さるる 栗の皮 園女

寄芭蕉雨

若月や雨をひくいて文字をさるるはは千子
 神垣や山百をさるるはは千子
 先月や名もの言をさるるはは千子

雨後曉天晴

ぼつと目をたひく田このハ月んは園女
 月マる子あよゆまらん如影紙 十
 夜ぬまハるあす月のの口のれりハ
 薄一子もあさく日とあやをの月ハ
 天のたのすく一物よご日の月ハ
 知月や浴衣ハく着るらんめ
 若月や青く出ハ入櫛の中 せん

多きをれおとくハるをの月嵐光 子

我手子と曾ナるあはの月ハ他浦知仲妹

月ハのふれ一いてくハる哀抱女 九重

一とあさくハる盗んてけあ辰下

かつ男の懐も入や園ハ月 八糸代

けあの月ハとハよさあお町ハ 我子

揚貴妃の睡ててもあの月ハ

月ハと和泉衣ハるも折るハ

名月や志賀の破田の松いろ 智月
 二つあつそいさるひでせぬの月、
 川上へ菜を洗ふの月、
 天水子とわさし月籠す一盃、
 おろくとむくを月の中きん、
 名月不物と春を春を春、
 立待や痺直さん白の上、
 居待月 起しちるん松柳、

藤花月舟も志つう 柳以和、
 月日はおと火の松と 岡一 ぬれ
 少新方も由るまは 平くせりか
 腋の立待や松乃片拍子 作別子
 海邊薄
 むら舟輪子もら風や帆の余、
 周女
 ちつとく 粟子も似て ちつとく、
 送子の親のおやすみ ちつとく、

乳の乳をちと無聲其室よりん^乳 万里

乳の乳を^乳のありはるる中

擲さるる力あるこそ^乳 萬里^乳 長門

乳を^乳てかて^乳 萬里^乳 萬里

法隆寺

二王よりより^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の分て^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

乳の乳の^乳 萬里^乳 萬里

礼の故や志りも拂りて老の伽 秋三
けくろく平 誰りたりもるる 鷗の鳴り

梅の枝より 鷗の鳴り

鷗の子をそとく ありて 素聲

粟の子も ぬきつけ 村の音

嵐蘭子を悼

鳴也 つく米に けり 稲の音 智月

満さる 秋の 影も 秋の 魁

沙汰あり 後にも 四才 崔 田上尼

でより 木子 蜻蛉も 辰下

小原女や 那分り 子向ふ 抱帯 園女

山田古猿 女の 粟の 鳴子 菊 志げ

渡を 梅を 子かき 妻 飛

木に ありて 水の 音も 樹の 音 園女

七文の 七回 言を する ありて ありて

室の 子も 気さ かけし 尼仲 間 智月

と梅のくちろ寸りなまからが京 七
 七交の花のたれやま梅の花冬月
 赤なつむ船まからさ世を誰か能く
 との色をりけり折あんなの菊すめ
 菊のむらじまあてあまなあま
 葉赤見や障子のあはれのさ松吹
 月香子菊や白ひくあは
 白菊子うらのあはる銀他糖北と

実や菊焙炒子あり人の肌黄口
 飯や飯菊の葉赤のけあ花梅
 ます升より奉納の内
 本仲の松の穂ひ子をあのく園女
 淋は入ある徳も回引の表尼花子
 菊のあや水誰そらりる乳唯次毒
 くの葉朝花あはらる流園女
 菊あはらる中ひ梅あらるいち娘

菊をさし置る葉のむふはえの掛は 辰下
重義多うまて

世の人の志くぬをあらはし推周
抱帯とかはし 菊のむふはえ

我ひくらさくらぬせぬおき
龍あぬさくらむかひなる

思おきてくまをぬれくひあはし
我のむふ置おきむかひの舎り子

我のむふ置おきむかひの舎り子

社のまきつらぬれくむかひの舎り子 月峯

我人の合点志あらし秋の舎り 京文字

彦山より訪同玉五百羅漢をなむ

侍るくくく樵の通るくくくおき春

とのあ湖子入たのあくと五六里

世くみ外の村もくくくは日乃

くくくくくくくくくくく

社のた一月出くくくくく 田上尼

うつくしの髪なほくまや蓬那 西南
冠里公八月めそられ侍るを

武士の御世よりこころに女とて舞
穿人の肩あがりなり舞のそれ そめ

知るあはぬ力のあはれ 知るあはれ 智月

おろけく三十日のあはれ星の照 園女

冬之部

作らんとしちうひくくも
あはれとちやとちうかなり

いづりりところちと思はれ 初め 依はる母 けの

かあきの身あはれ雨く川 定都の始 の音 連女

いやはしほし星のましくあはれ 羽 羽

をたを河園 智 智 園 園

神 穂

此後とまゝる久しにあはれ

とさふのよとらういひえぬ角々肥後求麻里木氏ふあそ
児の親のよまといとぬ一いれ格女あそ
まらくと今のとらういひえぬ角々格女あそ

蕉翁 初七日をいそそ

あうけえい海らんりあ時及びかや
我袖のあうけい世のたけいれ格女あそ
あうけえいあうけいあうけいあうけい
たかあうけいあうけいあうけいあうけい

蕉翁 二七日をいそそ

ふ揃のあうけいあうけいあうけいあうけい
木くの根のあうけいあうけいあうけいあうけい
まあけいあうけいあうけいあうけいあうけい
あうけいあうけいあうけいあうけいあうけい
あうけいあうけいあうけいあうけいあうけい
あうけいあうけいあうけいあうけいあうけい
あうけいあうけいあうけいあうけいあうけい

長冬の島の雪は白くもよみ 縁香
あまの雪は白くもよみ 縁香

宝音舟ののり馬よりかき

あまの雪は白くもよみ 縁香

初雪の冬は白くもよみ 縁香

初雪の冬は白くもよみ 縁香

蘭子東行をよみ

雪の思ふふもよみ 縁香

いとくさくさの雪は白くもよみ 縁香

佛の日後ふりりれの雪の肌、

老のあまの雪は白くもよみ 縁香

雪の思ふふもよみ 縁香

いとくさくさの雪は白くもよみ 縁香

あまの雪は白くもよみ 縁香

少おの尾の雪は白くもよみ 縁香

大雪やあまの雪は白くもよみ 縁香

月あはれ日なきくさりりの雪ヨ女 大板ま延母

此頃の雪らつ雪まよのあれの果 尾花

まのくしりなきし

白くしし京の足目く雪ゆ雪 此色

會志定離せよまらつたのる ゆき

かりゆらや雪をそよひてりへる猫 セ、堀江氏妻

白鶴の写しを雪のつねけ 光貞妻

まらけのよ枝あつてる雪なけ 羽衣

この足ちと傷る予をのきん 日月記 辰下

は帯とらつを連るまのおか おと

糸子あつてはまを し ねの雪とめ

津にたれと雪あふ ゆる まぬま おと

雪まらり ま と つ 消る玉散 七

はる は 木の葉 ま 包む ま ぬ は 汐 い

志 あ くと 子 を 取 り く 雪 は 我 ら

舊の百二七日 唐系

おこゆて 坊ぬき ちるちる けふ ちる
 流もく ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 十海の 油を 戻の 水への 舟 ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 知し ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 富土 坊ぬき や 女のと の ちるちる ちる
 ちるちる の ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる

へんさん ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるの 島

ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる

ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる

ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる
 ちるちる ちるちる ちるちる ちるちる ちる

さやのよさき手さく又くかつら 万里
水依の葉のさきさきの日影は ち月
いさるもさくし

お松節をさくさくし 女 あはれ

園菜の村さくさくし

うさきさくさくさくさくさくさくさく
石さく人形はさくさくさく きり

雪三回さくさくさく

お松さくさくさくさくさくさく
あさきさくさくさくさくさくさく 園女
ささきさくさくさくさくさく 眉の紐
風さくさくさくさくさくさく 色
お松さくさくさくさくさく 色
遊戯
お松さくさくさくさくさく 色
お松さくさくさくさくさく 色
お松さくさくさくさくさく 色

木よりく色まゝん人散世に 智月
風を抜る一突りり老の故、
我形の名ねふん也の括り、

芭蕉公相三十七日

像の画子物ひくろくを、

四七日

おのりやせよあそこの隠れ公、

六七日

法の月思くそ少るくを証、

盡七日

嘆きく及古のえさむ生火桶、

酒盛らく一そとまてくのそ、

行よせそく学つ羽とくの暮、

年月立春

おのまゝんのあや梅のそ、

大江山物志ゆら世有らる極ゆら

うら流く首望まきの志は深 若菜女
 家ハ軒しと終をねとあん
 さいめそやくこくくと反古と野で
 火桶ひとちをてんおりの是ら
 何のきりく修成粧改を
 ちりあのもちりはなとひとち
 吾をちるさきとさしきうは
 といこめくハあまのくわれを

めとのつちれてそこのめ
 とりがくそあひま

孫もよのおま子頼のちの世も周女

閑居

世の音は犬吠くる嵐は
 ゆくまのそを巻く小町の橋
 ちあ菊うあわさ古しとあま
 大とくそ母のまはら人か羽紅

るるるるるるの侍るるるる

雪ころりるるるるるるるる

猪俣の女とらばらるるるるるる

谷雲席和尚

園女

ある書の青教あらしむる

真不求元女大道の根源誰と

みんしん新将ふらるるるる

かゝるく一心源歌子のけりる

の新色ハ柳緑花紅只そら

るるそ常よりるるらるるら

はるるるあるるらるるるる

無益

の口業もさうく一劫経もせざるの
口業もさうく法を信じての口業の
さうく所作ありハ念佛とると
おとし極ちくはハよ
世に極ちくはハよ
おとし極ちくはハよ
歩りきりてハよ
く

和玉韻

自己念其不覓心 法灯已耀一灯心
市中點ニ有明鏡 全識人間清淨心
誰るんこれきりてハよ
とまらぬはのさうく

集おめん梓お為りてけけの人のえん
をにおえんとおれりいそつ後
人あるししてをけぬおのふか
思ぬるこも少くおよもあは
にやう一形もそを現とて
あつらふ事をもとてにありぬ

東越 田女

安永三年

甲午八月吉日

大坂書林 玉水源右衛門

平安書舗 安藤八左衛門梓

十五

